１９．鎌田　恭幸氏（鎌倉投信株式会社　代表取締役社長）

「北九州市から日本を、世界を変えるという、世界的なビジョンと本気さを持ったまちに。」

鎌田 恭幸（かまた　やすゆき）
島根県出身。
北九州市アドバイザー 東京都立大学法学部卒業。三井信託銀行（現三井住友信託銀行）、その後、バークレイズ・グローバル・インベスターズ信託銀行（現ﾌﾞﾗｯｸﾛｯｸ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ）にて 30 年以上にわたり資産運用業務に携わる。株式等の運用、運用商品の企画、年金等の機関投資家営業等を経て、同行の代表取締役副社長を務める。2008 年 11 月に鎌倉投信株式会社を設立。代表取締役社長に就任。

「ものづくりが築いた基盤と多様性」

北九州市の大きな強みは、戦後の高度成長を支えたものづくりの基盤があることです。公害を克服した連携の歴史にも大きな意味があります。環境意識の高まりや、響灘等での環境関連産業の集積も、その歴史があるからこそだと思います。

TOTO㈱など、日本を代表するものづくりの大企業が今も拠点を置いていることに加えて、港や空港などの物流も整備されています。これは大きな財産であり、将来も引き継いで大事にすべきアセットです。

また、医療についても先端的な地域と言えます。北九州市は、医大もあり、病院も多い地域です。医療・福祉へのものづくりの技術導入や、インバウンドの医療関連のニーズ喚起などの基盤となり得ます。

さらに、大学の存在も非常に重要な要素です。特に工業系、情報系大学があることで、研究開発型の事業に欠かせない人材の育成やスタートアップの輩出が期待できます。

食も含めた観光や文化も、五市対等合併による地域の多様性に関係するのではないでしょうか。これも過去が作った価値であり、地域の多様性という魅力が人を集める要素になる。特に門司は、産業と文化が融合した地域であり、あのような雰囲気は、他地域にはなかなかないでしょう。

「まちを本気で変える「一丸力」が必要」

これらのアセットをポテンシャルとして成長させるには、起爆剤が必要です。今あるアセットを繋げてイノベーションを起こす、また循環型の仕組みを作っていくために何が起爆剤になり得るのか、みんなで知恵を絞り、まちの構造を変えていくことが、今後のまちづくりのポイントになるでしょう。

そのためには、「北九州市を本気で変えていこう」「発展させていこう」「世界から注目されるまちにしよう」という「一丸力」が求められます。人もお金も出して、「本気」で取り組む主体が少しずつでも出てくると、それが大きなエネルギーになっていきます。

特に、大学の中での起業家育成やシーズの発掘は絶対に必要です。北九州市の規模の都市なら、企業もシーズもそれなりにあると思います。しかし、ここで難しいのが、事業化です。東京では、スタートアップ企業や研究者同士のコミュニケーションがとりやすい環境ですが、北九州市では、どうしても情報量が少なくなってし

まいます。そこをカバーするためには、大企業のネットワークや技術力を活用して、シナジーを生むポイントを創出することが必要です。

また、人材育成の観点からは、大学や高専、高校等で、事業を興して社会問題を解決し、北九州市を発展させる方策を検討する授業を行い、大企業にそのスポンサーになってもらうことも考えられます。

一方で、地場産業の後継者不足も大きな課題でしょう。歴史のある中堅企業と、これからグロースさせる企業の両方を伸ばす仕組みをつくるには、やはり大企業や地元金融機関との連携による支援の枠組み構築が求められます。

規模の大小を問わず、元気がある地域は、行政と民間、地元住民の一体感があり、「本気」の人が複数います。北九州市と一緒に、「ここから日本を変えていくぞ」と取り組む大企業が数多く現れてくると良いですね。

「社会インフラとしてのデジタル実装」

広い意味でのまちづくりでは、GX・DX・AI 等、デジタル関連の先端技術を、社会インフラとして実装し切ることが重要だと思います。市役所をはじめ、医療現場、学校、民間企業等も含めて、まち全体が便利になり、シームレスなコミュニケーションが行われることが求められます。デジタルは、若い人や子育て世帯の移住促進に必要不可欠なインフラであり、安心・安全の確保や高齢化への対応という意味でも欠かせないキーワードです。例えば、九州工業大学が研究している先端的なデジタル技術の日常社会への導入に向け、実証実験の場を創出するなど、様々な仮説検証が市内でできれば、社会インフラの面でも最先端の都市になれるでしょう。

「世界的なビジョンを持つ先端のまちへ」

北九州市には、いろいろな意味で「先端のまち」になってほしいと思います。

私が金融の立場でいろんな地域や都市とかかわりを持つ中で感じるのは、多くの地域の人たちは、「自分たちの地域を何とかしなくてはいけない」「自分たちの地域の課題をどう解決するか」という内向きの視点が強く、発想が地域の中で閉ざされてしまっていることです。

自分たちの地域から日本、世界をどう変えるかというビジョンがないと、自分たちの地域の課題が解決しても、他の地域では何も変わらないという状況になります。例えば、人口流入なら、北九州市の人口が増えても、他地域の人口が減るだけで、課題の移転にしかなりません。

北九州市には、ここから日本を変える、世界を変えるという、世界的なビジョンと本気さを持ったまちになってほしいと思います。言い換えると、「世界から注目されるまち」ということであり、地域の課題があっても、世界の模範として注目されるという視点が必要です。人を集めるための政策ではなく、人が自然と集まりたくなる面白さや魅力があるまちの姿を考えれば、そこから新しい産業やまちの姿が見えてくるでしょう。